

京都府医師会看護専門学校

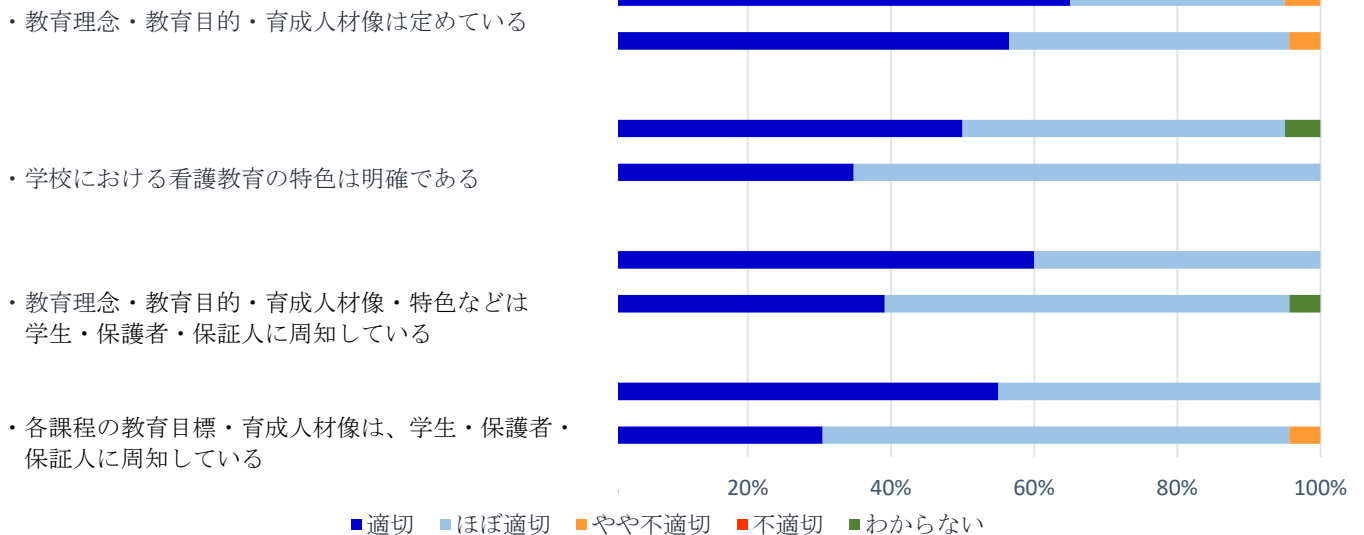
令和6年度 自己点検・自己評価

I. 教育理念・教育目標・人材育成

N=23

教育理念・目標

上段：R5年度
下段：R6年度



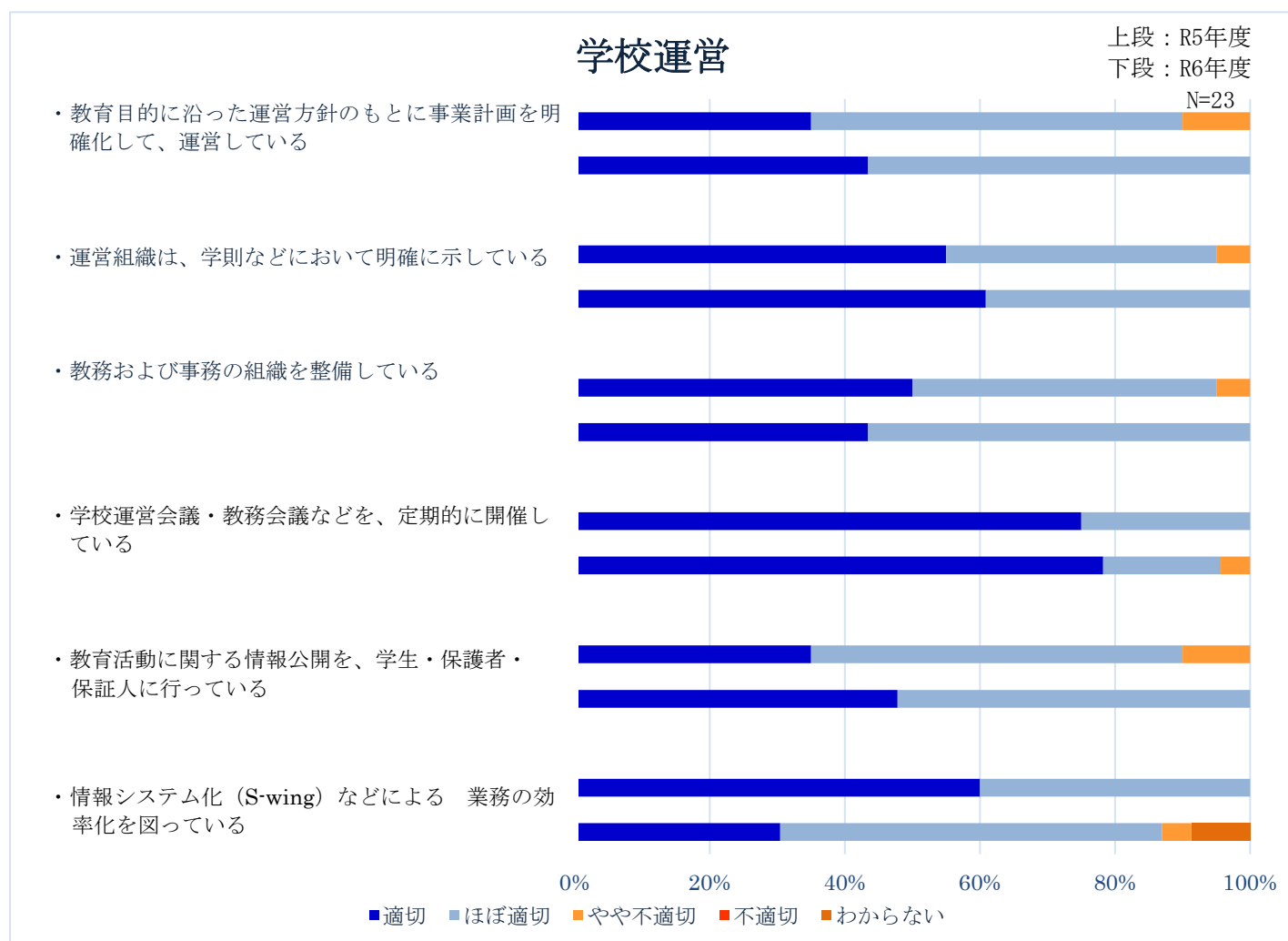
(1) 教育理念・目標

学校評価	意見
<p><現状></p> <p>全体的に肯定的な評価が多く、90%以上が「適切」または「ほぼ適切」と回答した。特に「学校における看護教育の特色は明確である」は、全員が「適切」「ほぼ適切」と評価した。</p> <p>しかし、「教育理念・教育目的・育成人材像・特色などを学生や保護者に周知している」「各課程の教育目標・育成人材像は、学生・保護者・保証人に周知している」の2項目では、わずかなではあるが「わからない」「やや不適切」との回答が見られた。</p> <p>教育理念や目標については、入学時に副校長・教務主任が時間をかけて説明しているが、保護者への説明は保証人会のみとなっている。</p> <p><総括></p> <p>教育理念・目標が概ね肯定的に評価されたのは、学内での教員研修やシンポジウムを通じた取り組みにより、教職員がディプロマポリシーを意識した教育活動に取り組んできた成果と考えられる。教職員の意識改革と日々の教育実践が反映された結果と評価できる。</p>	<p>肯定的意見が90%以上を超えていることから職員は項目内容を理解し浸透していると言える。閉校まで全力で責任ある教育を行う強い意思を感じる。知りたい時に検索できるHPやInstagram等を上手く利用すれば周知は可能だと考える。理解しやすい内容にする必要がある。</p> <p>すべての項目で肯定的な評価が多く、教育理念・教育目標・教育人材像・教育理念等が周知され、組織としての骨格は理想的であると言える。教育理念・目標が概ね肯定的評価であり意識し努力されている成果であると思います。次年度の課題と方略に記されていることやSNS等の活用を含めた活動の継続が望ましいと思います。</p> <p>理念や教育目標は明確である。看護師または助産師を志して入学されるため学生の意識は高い。保護者への周知について令和6年度で適切評価が減少していることが気になるが、学生自身の責任能力の低下も想定されるのではないかと。</p>

<p>一方で、①学生や保護者への周知に関しては「わからない」「やや不適切」という回答が見られた。特に「学生や保護者からの発言から、十分に周知されていないと感ずることがある」という意見があったことから、本校の特色を日々の学生指導や保証人会を通じてより明確に伝えていく必要がある。また、保証人会以外でも周知していく必要がある。</p> <p>＜次年度の課題と方略＞</p> <p>新カリキュラムの推進にあたり、学生や保証人にも本校の教育理念・目標をより理解してもらうため、年間 2 回の評価・見直しを実施し、課題の抽出・改善を図る。</p> <p>また、本校の教育理念・目標に基づき、京都府に貢献できる人材育成に引き続き努めていく。①周知の方法として、保証人会以外にもInstagramや保護者のオクレンジャー登録を勧めていく。</p>	
--	--

Ⅱ 組織運営

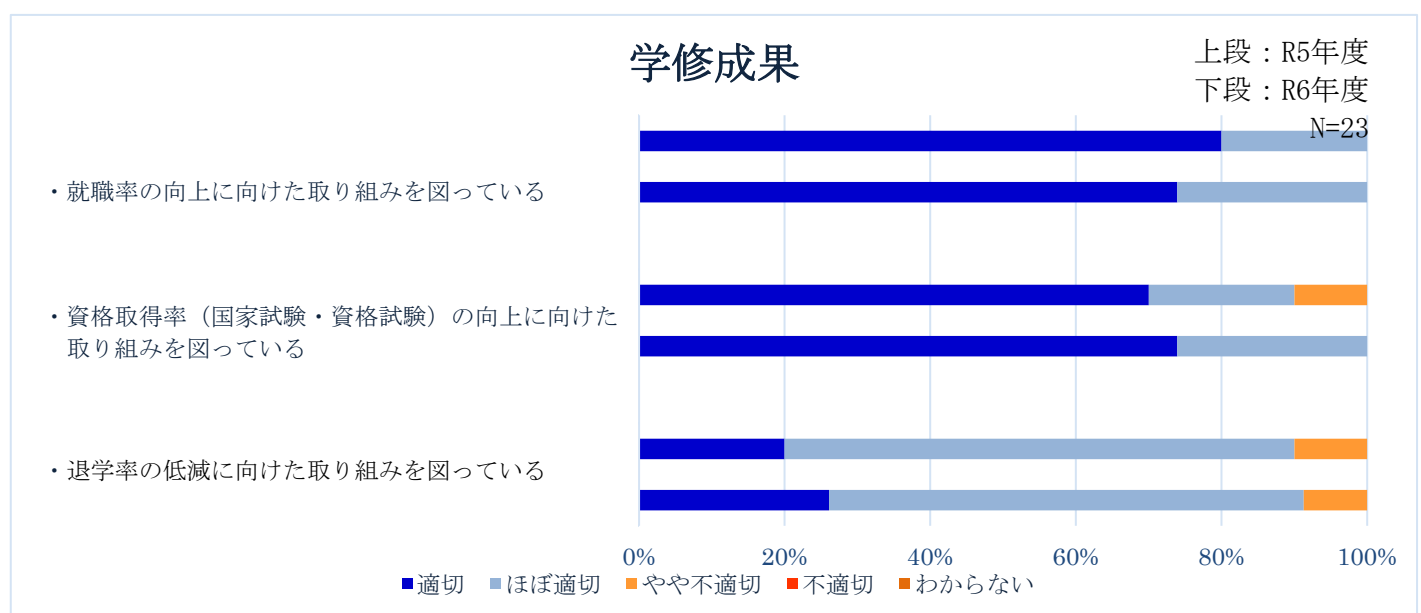
(1) 学校運営



学校評価	意見
<p><現状></p> <p>全体的に肯定的な評価の割合が高く、4 項目では「適切」または「ほぼ適切」が 100%となった。一方で、「学校運営会議・教務会議などを定期的開催している」について、一部に「やや不適切」との回答があり、その理由として「定期的開催されているが、教員の欠席が多い」との指摘があった。</p> <p>また、「情報管理システム (S-wing) などによる業務の効率化を図っている」に対しては、13%が「わからない」または「やや不適切」と回答した。主な理由として、以下のような意見が挙げられた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「効率性を聞かれると実感がない」・「新しいシステムの導入により、まだ活用しきれていない」 ・「S-wing をほとんど使用していないため、効果を実感できない」 ・「Teams やオクレンジャーなど複数のツールがあり、情報を探すのに時間がかかることがある」 <p><総括>学内での教員研修やシンポジウムの取り組みにより、教員一人ひとりの学校運営に対す</p>	<p>肯定的意見が多く、職員が学校運営に参画していることが理解できる。やむない会議欠席者については議事録を熟読し必要時説明することで補うことが現実的である。情報管理システムによる効率化は操作に慣れてくれば肯定意見に変わると思う。</p> <p>上記3項目は、すべてが「適切」・「ほぼ適切」であり、学校運営上の指針に沿ったものが出来ていると判断できる。一方、情報システム化による業務の効率化については、課題を感じる。</p> <p>全体的に肯定的な評価の中、「教員の欠席が多い」ことは少し残念ではある。日常業務の優先順位が高いのか、会議参加への重要性が低いのかは不明点が残る。業務の効率化については、情報システムを十分に活用できるよう指導を続けていくことで改善が図れると思います。</p> <p>情報管理システムによる効率化は学生世代と親世代ではギャップがあるのではないかと</p>

<p>る認識は向上したと考えられる。しかし、①会議の出席率向上は重要な課題である。やむを得ず欠席した場合は、議事録の熟読を必須とする必要がある。また、②情報管理システム（S-wing）は新たに導入されたこともあり、現時点では一部の教員が否定的な評価を示している。しかし、今後の運用を重ねることで、利便性が向上し、評価も改善されと考えられる。</p> <p><次年度の課題と方略></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全教員が学校運営に積極的に関わるための研修会や勉強会を継続する。 ・①会議の出席率を向上させる。やむを得ず欠席した教員には、議事録での確認を義務付ける。 ・②情報管理システム（S-wing）の円滑な運用を支援する体制を整える。 ・引き続き、教職員が一丸となり、本校の教育理念に沿った学生の育成に努める。 	<p>特に親世代では利用について得意・不得意があり現代化に伴うツール活用が学校と保護者間のコミュニケーション・情報収集の妨げになっていることが考えられるのではないかな。</p>
---	--

（２）学修成果



学校評価	意見
<p><現状>「就職率の向上に向けた取り組みを図っている」は、昨年同様「適切」「ほぼ適切」が100%であった。今年度の就職フェアには60施設が参加し、学生は希望する施設や興味のある施設の情報を直接得る機会となった。キャリアセンターの利用率はほぼ100%であった。キャリアセンターでは面接や小論文の指導に加え、業者との連携による面接・マナー講座を実施し、多角的な支援を行った。「資格取得率（国家試験・資格試験）の向上に向けた取り組みを図っている」は、昨年度10%が「わからない」だったが、</p>	<p>キャリアセンター利用率100%は、個別指導が行き届いている結果だと言える。職場選びのミスマッチを防ぐことは早期離職をなくし看護実践力を習得しながら次へのキャリアアップにつながることになる。早期からの国試対策は受験準備を刺激し主体的に勉強することにつながる。不合格者はアルバイトをしながらの勉強になるので同級生とも疎遠や孤独になり易いので母校の支援は欠かせない。看護学科・助産学科共に国試合格100%を達成してほしい。就職や資格取得の指導は、肯定的評価が100%</p>

今年度は「適切」「ほぼ適切」が 100%となった。全課程で模擬試験や対策講座を計画的に取り入れ、模擬試験の種類や時期を検討し、分析結果に基づいて学生の学習進度に応じた少人数のチューター制で指導を実施した。「退学の低減に向けた取り組み」は、昨年度 90%が「適切」「ほぼ適切」だったのに対し、今年度は 91%とほぼ変化がなかった。「やや不適切」は 9%、「不適切」「わからない」は 0%であった。

以下に学修成果についてデータを示す。

卒業生の就職状況

*助産学科 19 名

・ 大学病院 5 名、公的病院（都道府県・市町村）4 名、公的病院（国立・済生会・日赤等）2 名、一般病院 5 名、クリニック 2 名、その他 1 名

*看護学科 75 名

・ 大学病院 7 名、公的病院（都道府県・市町村）4 名、公的病院（国立・済生会・日赤等）7 名、一般病院 54 名、進学 1 名、その他 2 名

国家試験結果

・ 助産学科：19 名受験、18 名合格 合格率 (94.7%) 全国平均 (99.3%)

・ 看護学科：75 名受験、73 名合格 合格率 (97.3%) 全国平均 (90.1%)

①退学率について

・ 看護学科の退学率：3.8%（前年と比べて減少） 卒業率 88.8%

・ 助産学科の退学率：10.0%（前年と比べて増加） 卒業率 90.0%

退学理由は学業不振、体調不良、進路変更、家庭の事情であった。

<評価>

就職支援について

キャリアセンターでは面談や小論文指導に加え、業者との連携によるマナー・面接講座を実施し、学生のニーズに沿ったサポート体制が確立されつつある。就職相談や採用決定に関する情報は、各学年のキャリアセンター担当が取りまとめ、学生の就職状況の把握がよりスムーズに行えるようになっている。医療機関の採用試験は年々早期化しており、各学年で進路希望や奨学金貸与を含めた就職状況を把握する面談を実施することで、学生の希望に沿った支援が可能となった。また、キャリアセンターを通じて就職内定状況を学校管理者や学年担当者が把握できる体制も整っている。

今後も、各施設の募集状況の把握や京都府看護協会との連携を強化し、学生へタイムリーな情報提供を行うことが必要である。

国家試験・資格試験対策について

模擬試験や対策講座の種類・時期を検討し、計画

であり、その仕組みが確立したものであることを感じる。日頃から丁寧な指導がなされていると感じる。退学率の低減については、より組織的な対応を期待したい。

就職支援については、サポート体制が十分に整っており現状の継続及び学生の希望・要望に添える支援の継続で良いかと思います。国試対策は成果が現れて、高い合格率を実現されているので継続で良いと思います。

就職率の向上に向けた関わりは高評価が得られている。就職後の勤続年数なども知ることができれば今後の学生の就職活動に影響するのではないかと。国家試験対策として 1 学年次より介入することで経験と知識がリンクすることで効果が期待できる。

的に実施した結果、学生個々の学習ペースに応じた効果的な指導が行えた。特に成績下位層には手厚いサポートを行い、学習面だけでなく精神的ケアも行ったことで、安定して学習を継続できた。一方で、中位層の指導には課題が残った。また、模擬試験や集中講義の時期、特に学内教員が実施する国家試験対策講義については、時期や内容の再検討が必要である。

退学低減について

学生の学習状況や心身の状態を把握するため、担任が定期的な面談や気になる学生への声かけを行っている。スクールカウンセラーとの連携も継続しているが、単にカウンセラーに任せるのではなく、担任自身が学生の状況を把握し、些細な変化にも気づくことが重要である。

＜次年度の課題と方策＞

就職支援

キャリアセンターを中心に、学生へのタイムリーな情報提供や面談を継続する。令和7年度の就職フェアは京都府看護協会他、外部開催の情報や各施設の採用情報をより積極的に収集し、学生へ迅速に周知し積極的に参加するよう促していく。

①退学低減

担任が学生の学習状況や心身の状態を日常的に把握し、定期的な面談や個別の声かけを強化する。スクールカウンセラーとの連携を継続しつつ、担任が主体的に対応する体制を維持する。

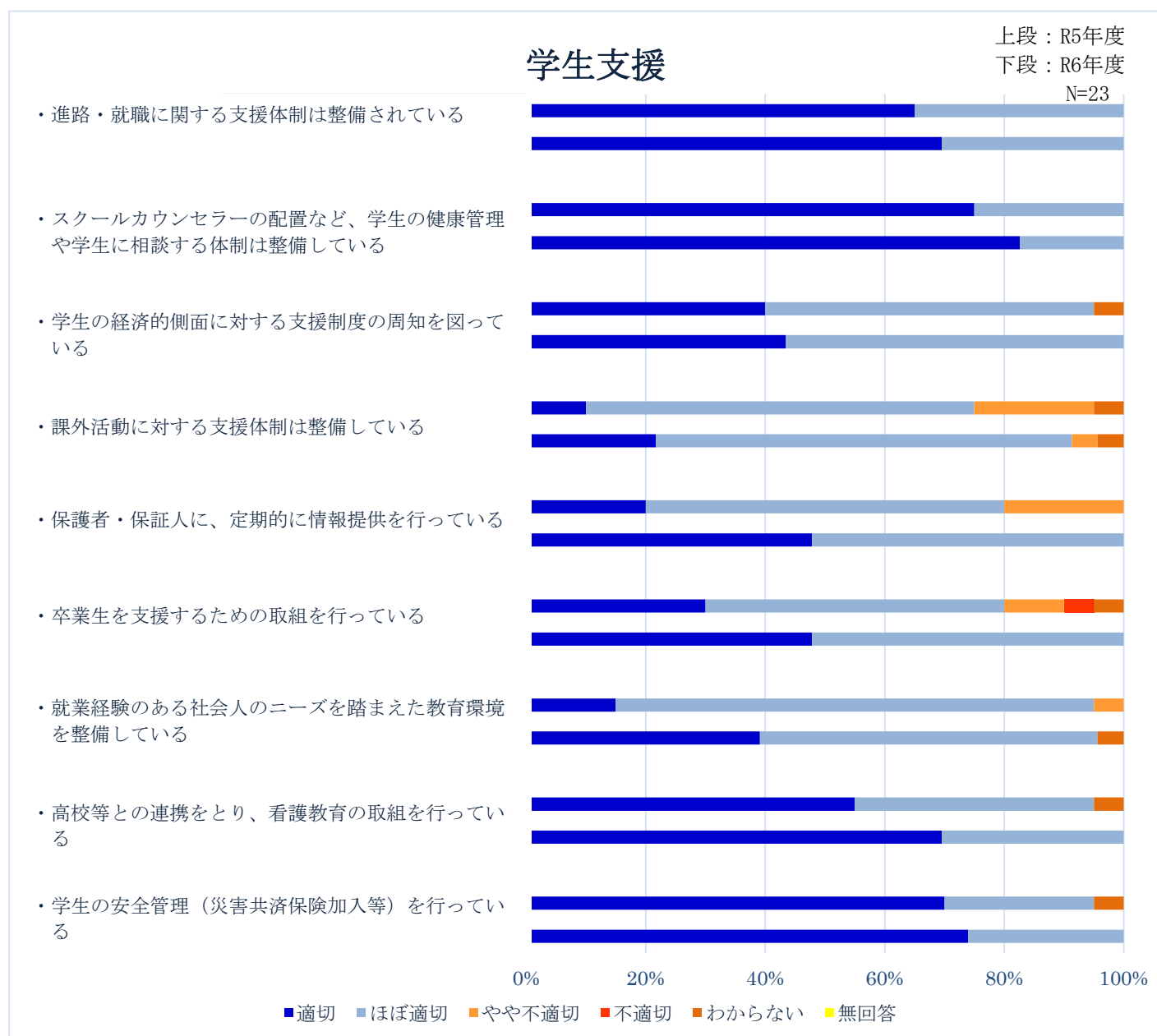
※2年生 2チーム制で7名で対応

国家試験対策

看護学科:1年生の入学時から国家試験を意識させる取り組みを強化する。現在、業者との連携による模擬試験を実施しているが、家庭学習につながっていないという課題があるため、授業内で国家試験問題を積極的に活用し、日常的に問題演習に慣れさせる。また、筆記試験だけでなく課題を活用し、授業時間外でも学習できる環境を整える。

助産学科:入学時から国家試験を意識した取り組みを強化する。日々の朝テスト、学習ノートによる支援に加え定期的に力試しテストや業者模試を実施する。家庭学習の習慣化、暗記による学習から理解につながる学習方法定着に向けての支援。国家試験100%合格に向けて学生個々の到達度に応じた丁寧な支援を強化する。

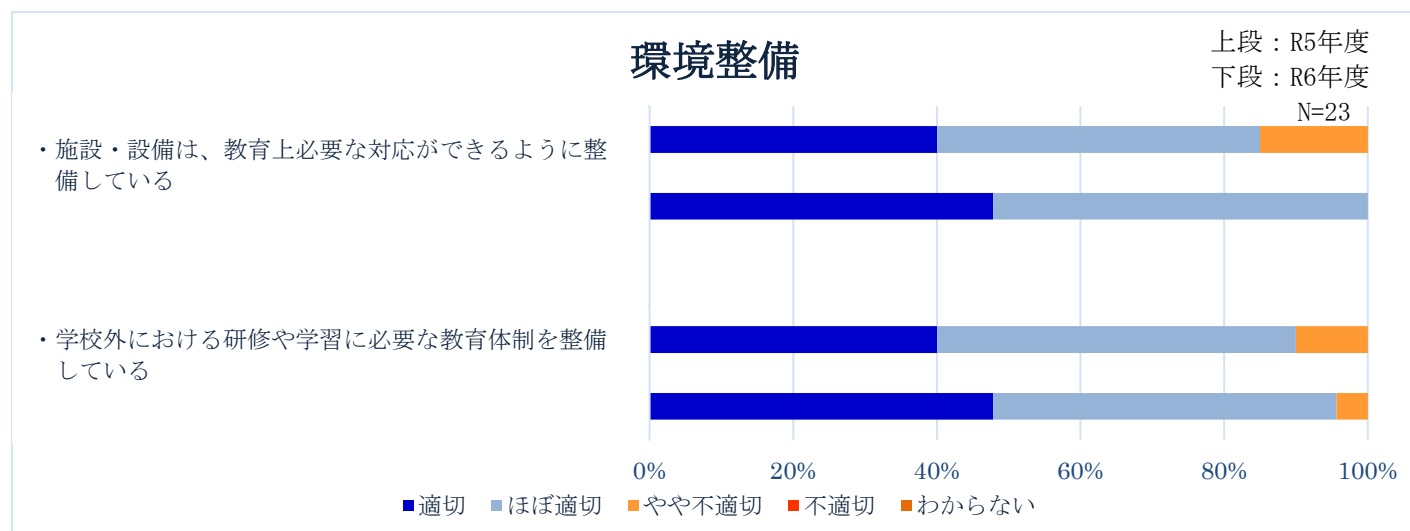
(3) 学生支援



学校評価	意見
<p><現状></p> <p>9項目中7項目で「適切」「やや適切」が100%になり、特に「保護者・保証人に、定期的に情報提供を行っている」および「卒業生を支援するための取組を行っている」は、昨年度80%だったが、今年度はどちらも100%となり、大幅に向上した。また、「課外活動に対する支援体制は整備している」では、「やや不適切」「わからない」が25%から8%に減少した。</p> <p>課外活動については、昼休みや放課後に体育館の解放を行い、学生に身体を動かす機会を提供した。保証人会は11月9日に開催し、保護者19名および7施設からの施設保証人が出席した。卒業生支援では、カムバックスクールの開催や図書室</p>	<p>肯定的意見が多く、学生生活を安心して送れる体制が整備されている。支援に関する多種な方法に取り組み、学生も周囲から支援されていると感じていると推察できる。施設保証人が学校側から情報提供を直に受ける機会は奨励学生管理として貴重である。</p> <p>すべての項目において、昨年度よりも肯定率が上昇している。学生に寄り添った丁寧な指導が感じられる。</p> <p>課題であるコロナ以降の課外授業の実行は、強化対策が必要であると思います。その道を選んだとはいえ普通の大学生とは違い看護学生らの大変さは体験者として理解できる。その中で、少しの楽しい活動が癒しにもやる気にも繋がるの</p>

<p>の解放などを行った。</p> <p>＜評価＞</p> <p>就職フェアやキャリアセンターの活動が定着し、円滑な就職支援に繋がり、効果が表れている。特に就職率の向上のみならず学生からの満足度も高くなった。また、スクールカウンセリングにおいても、入学時のアンケートや学生の様子を基に必要に応じて担任からスムーズにカウンセリングが行われた。保護者への情報提供についても、保証人会の開催回数は年1回のみであったが、担任から必要に応じた連絡が適切に行われたことが評価され、100%の「適切」「ほぼ適切」の評価を得た。「課外活動に対する支援体制は整備している」については、「やや不適切」「わからない」が8%となり、昨年度の25%から改善された。しかし、「課外活動時間に見合った課外活動ではなく、学生、教員の負担が大きい」「課外活動がボランティア活動などの事であれば、コロナ禍以降ほぼ実施されていないので分からない」といった意見があった。ボランティアを含む課外活動はコロナ禍以降、その活動への支援が減少していることも一因として挙げられる。また、課外活動に関する教職員間での認識の差異が生じている可能性もあり、課外活動の内容や参加機会の提供方法に関して、今後、教職員間で共通理解できるよう調整が必要である。</p> <p>＜次年度への課題と方策＞</p> <p><u>キャリアセンターの活用</u></p> <p>就職フェアやキャリアセンターの活動を引き続き継続し、学生の就職支援を一層強化する。具体的には、企業との連携を深め、学生のより多くのニーズに対応できるようにする。</p> <p><u>スクールカウンセリングの支援</u></p> <p>学生の心理的サポートを引き続き行い、必要に応じたカウンセリングがスムーズに行える体制を継続する。担任とカウンセラーの連携をより密にし、学生の状態に応じたサポートを強化する。</p> <p><u>保証人会</u></p> <p>保護者への情報提供については、年に1回の保証人会開催だけでなく、必要に応じて担任から保護者への連絡を適切に行い、学生支援に取り組む。例えば、個別相談会やオンラインでの情報提供を検討する。オクレンジャーへの登録を勧める。</p> <p><u>課外活動の支援体制強化</u></p> <p>体育館の解放以外にも、休み時間や放課後に実施可能な他の活動について検討、周知する。また、ボランティア活動を課外活動に含める場合、学校側がその情報を把握し、学生に参加を促すための仕組みを構築する。具体的には、ボランティア情報の定期的な提供や、学生への参加を呼びかける。</p>	<p>ではないかと思います。</p> <p>令和5年度より高評価が得られている。カムバックスクールについては学生が特に興味を示す内容と思われるため、多くの卒業生と積極的な意見交換など継続してほしい。</p>
--	---

(4) 教育環境
ア 環境設備



学校評価	意見
<p><現状></p> <p>「施設・設備は教育上必要な対応ができるように整えている」については、昨年度は「やや不適切」が15%であったが、今年度は肯定的評価が100%となった。コロナ禍に整備された校内全館のWi-Fi環境、オンライン授業体制、Webカメラ、スクリーン、スピーカー、マイク等の教育機器が有効に活用されている。また、電子教科書導入2年目にあたり、iPadの活用方法が多様化し、ペーパーレス化が定着した。一方で、校内の空調整備に関しては、SDGsの観点から館内の温度設定を統一していることにより、教室によっては寒さを訴える学生の意見が見受けられた。「学校外における研修や学習に必要な教育体制を整備している」については、肯定的評価が96%を占め、「やや不適切」の回答は昨年度より6%減少した。課外授業は概ね計画通りに進行し、臨地実習についても感染症対策に留意しながら、現地での実施が可能となった。</p> <p><総括></p> <p>学校の環境整備は、学生のみならず教職員にとっても適応可能なものとなっており、コロナ禍に整備されたICT環境の活用はさらに充実したと言える。学外における教育体制については、特に実習以外の校外学習(1年生)においては担任の負担が大きいとの意見が挙げられている。</p> <p><次年度の課題と方略></p> <p>直近の課題として、実習および校外学習における指導体制の見直しと整備が求められる。また、教室内の寒暖対策については、学生の意見を踏まえつつ、引き続きSDGsの観点から冷暖房設備の過度な使用を抑えることを、教職員・学生ともに共通認識として持ちながら対応していく必要がある。そのほかの</p>	<p>コロナ禍を機会に施設環境が整備されている。シミュレータを使った演習は臨場感が増し実習のイメージがしやすいと思う。</p> <p>両項目ともに、昨年度より肯定率が上昇している。施設・環境の整備、教育体制の整備について、充実していることが窺える。</p> <p>施設・設備については、肯定的評価が100%であり、継続で問題ないと思います。臨地実習に本来通りの体制が戻ってきたことは、学生の経験値の向上では非常に大きいと思います。引き続き、学生や教職員の意見に柔軟に対応されることで良い環境の提供に繋がると 생각합니다。</p> <p>高評価であることから時代に応じた教育環境である。</p>

学習環境についても、学生の声や教職員の意見を継続的に吸い上げ、柔軟に対応していく体制を構築していく。	
--	--

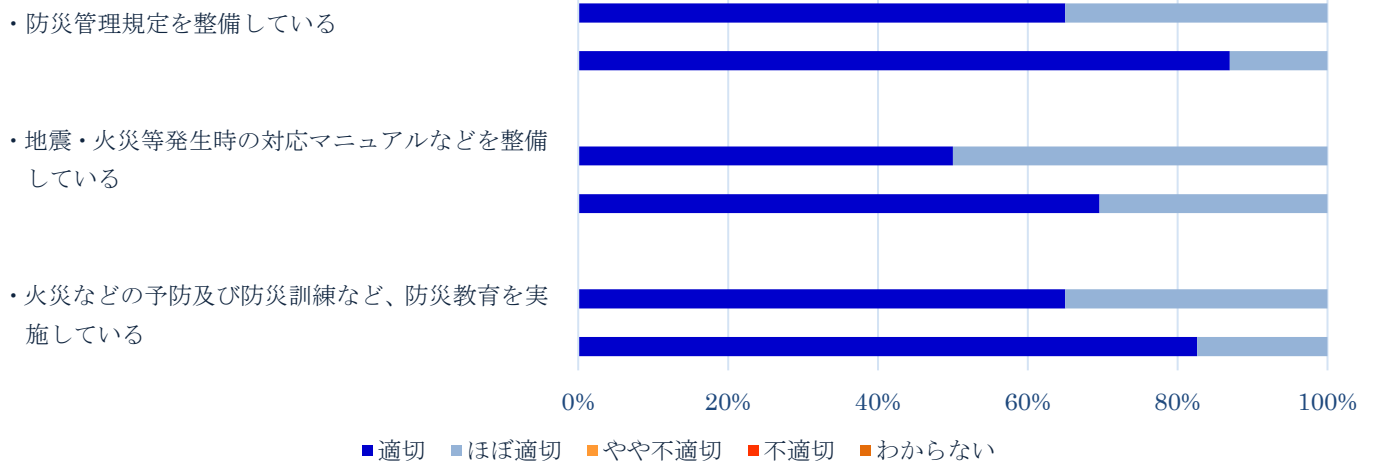
イ 防災管理

上段：R5 年度

下段：R6 年度

防災管理

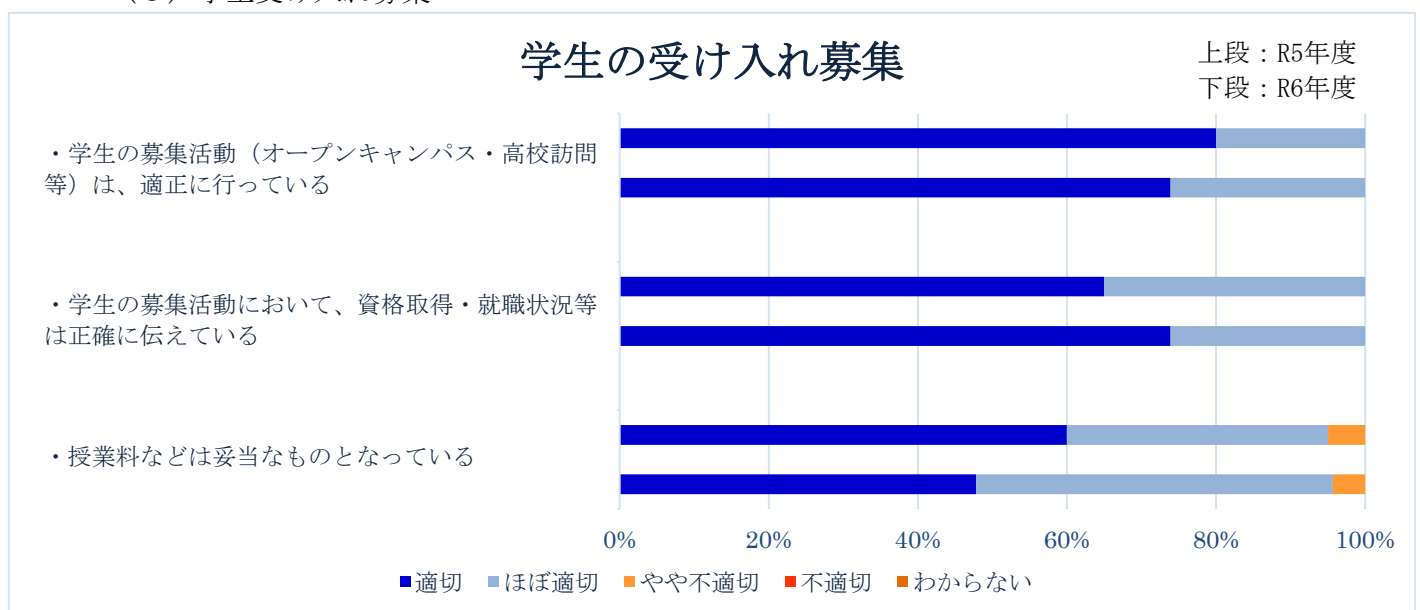
N=23



学校評価	意見
<p><現状></p> <p>昨年度同様、防災管理に関する3項目について、「適切」「ほぼ適切」との肯定的評価が100%を維持した。今年度も学生、教職員対象の防災訓練を実施した。事前に防災規程や防災マニュアルの周知を行い、学生の意識付けに努めた。訓練当日は出火場所の事前通知を行わず、状況に応じた判断と行動が求められる形式で実施した。</p> <p>令和6年1月1日に発生した能登半島地震では、安否確認を行ったが、長期休暇中であったこともあり、学生の安否確認は翌日以降となった。また、2月14日の京都府南部を震源とする最大震度4の地震発生時には授業中であり、突然の揺れにより、初動マニュアルに沿った対応が十分に取れなかった。この反省を踏まえ、3月にはシェイクアウト訓練を実施し、教職員の動きを確認した。以降は、毎朝の始業時に学生・教職員数の把握と共有を行い、緊急時初動マニュアルの掲示を通じた意識づけを継続している。また、本校が指定されている妊産婦等福祉避難所に関しては、今年度、京都市主催の机上訓練への参加を希望したが、実現には至らなかった。</p> <p><総括></p>	<p>定例の防災訓練は学生・職員参加で継続しており、防災規定やマニュアルの周知もされている。毎年、地震や異常気象による災害が頻発しているので災害看護を考える機会にもなる。</p> <p>すべての項目で昨年度を上回っており、すべての項目で肯定率100%である。防災管理の意識の高さを感じる。</p> <p>防災に関しては、日常起きえない事への対応であるが、どの職場でも学校でも優先度は高いと思います。マニュアルの周知と実行との整合性確認は、短時間でも確実に行うことが良いと思います。3.11や1.1で起きた事をユーチューブ等で共有し話し合い、マニュアルの確認をするのも一つ。</p> <p>防災教育の一環としてDMATや災害支援ナースなどの聴講を検討するなどリアルな体験に基づいた学習環境の提供も視野に入れてみてはいかがでしょうか。また教員だけではなく学生に防災士研修を募ってみるのも意識の向上につながるのでは。</p>

<p>評価に示されているとおり、防災規程や防災マニュアルの整備は進んでおり、防災訓練も継続して実施している。一方で、学生・教職員の状況把握については、日々確実に行われているとはいえず、教職員の防災への心構えに課題が見受けられた。いざという時に迅速な対応ができるよう、日頃から緊急時に備えた準備や初動マニュアルの意識づけ、定期的な周知徹底、そして臨場感のある訓練の継続実施が必要である。</p> <p>＜次年度の課題と方略＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初動マニュアルの定期的な共有を徹底すること。特に、年度初めの役割変更を踏まえ、各教職員が自らの役割を的確に把握できるよう周知を図る。 ・京都市による防災マニュアルの改正を受けて昨年度修正した本校の「妊産婦等福祉避難所マニュアル」をもとに、二次避難所としてのより実践的な対応力を養うため、リアルな訓練を計画・実施する必要がある。 ・次年度は、<u>防災士研修を受講した教員により校内の危険場所の点検を行い、防災管理の見直しを行っていく。</u> 	
--	--

(5) 学生受け入れ募集



学校評価	意見
<p>【現状】</p> <p>3 項目中 2 項目について、肯定的評価は 100%であった。本年度のオープンキャンパスは、来校型で 7 回実施し、そのうち 2 回は夜間開催とした。参加者数は昨年度より約 15%減少し 257 名となり、そのうち夜間開催への参加者は 32 名（全体の 12%）であった。各回においては、体験イベント、座談会、個別質問コーナーなど、在校生が対応するプログラムを実施し、看護学科および助産学科</p>	<p>学生確保につながるオープンキャンパスの回数や時間の工夫をしている。参加者が多いにもかかわらず応募者が伸びなかったり、辞退者が出るのは大学志向が一層進んでいる影響を受けている。社会人経験のある受験者にとっては貴重な専門学校である。</p> <p>学生の募集活動が 100%の肯定率であり、丁寧な対応や説明が実施できていることが窺</p>

の説明会も継続して行った。第5回目には、カムバックスクールに参加した卒業生との座談会を実施した。広報活動については、年度当初より教職員による高校訪問やオープンキャンパスの実施、SNSによる情報発信、ホームページの充実に努めた。2029年の閉校決定後は、2026年度看護学科入学生を想定し、広報内容や方法を調整した。

「授業料などは妥当なものとなっている」では、「適切」「ほぼ適切」が96%であり、4%が「わからない」と回答した。また、社会人入学生にとって重要な要素である教育訓練給付金については、令和7年度より再度指定講座としての指定を受けた。2025年度の入学生選抜において、受験者数への影響は確認されなかった。

【総括】オープンキャンパス参加者からは、「在校生や教職員との直接的な関わりを通して、学校の雰囲気や人間関係がよく伝わった」「卒業生の姿を見て将来像をイメージできた」といった意見が寄せられ、高い満足度が得られた。これらの意見は、教職員のやりがいやモチベーションの向上にもつながったと考えられる。授業料に関しては、多くの教職員がその妥当性を意識し、授業料に見合った教育の提供に取り組んでいることがうかがえる。また、「周囲の専門学校と比べて安価である」といった意見もあり、授業料をやや高く設定しても妥当であるとの前向きな意見と捉えることもできる。教育訓練給付金の指定講座となることにより、社会人の受験生にとっては本校受験の選択肢につながると思われる。今後も給付金の適用が継続できるよう、国家試験合格率の向上や退学者数の低減に向けた取り組みを進めていく必要がある。また、職業実践専門課程やキャリア形成促進プログラムの認定カリキュラムであることを本校の強みとしたい。

【次年度の課題と方略】看護学科および助産学科入学生の募集に向けて、これまでと同様にオープンキャンパスの開催、SNSによる情報発信、ホームページの充実に継続していく。また、在校生による発信は、同世代の視点から本校の魅力を伝える有効な手段であり、今後も継続して活用していく。特に次年度は看護学科において最後の入学生を迎える年度となる。より一層の広報強化が求められる。全教職員および学生が一体となり、「本校らしさ」や「学びの質」を発信できるよう、協働した広報活動を展開していく。また、教育訓練給付金の適用継続に向けては、国家試験合格率の向上や退学者数の低減といった教育の質的向上に取り組むとともに、本校が職業実践専門課程およびキャリア形成促進プログラムの認定を受けたカリキュラムを有していることを、今後の広報戦略においても積極的にアピールしていく。

える。授業料については、他校との比較になるため、詳細な他校の情報が必要である。看護学科最後の入学生を迎えるために、一層の広報活動を期待しています。今後も医師会に入学したい学生は多くおられるため、継続した受け入れ募集を期待します。

(6) 経営管理
ア 財務

経営管理

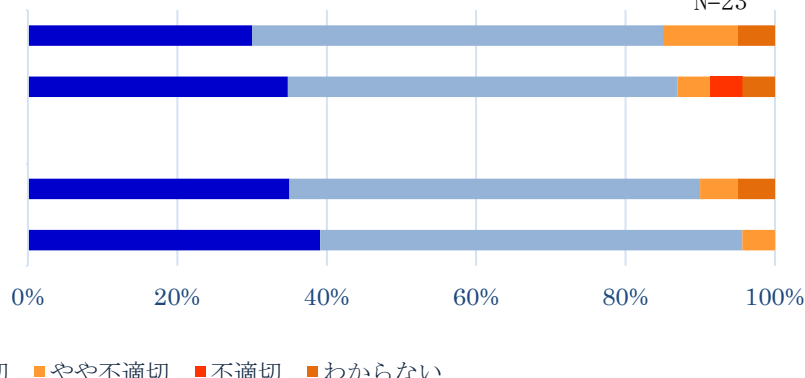
上段：R5年度

下段：R6年度

N=23

・財務状況の情報を、教員に公開している

・事業報告を適時行っている

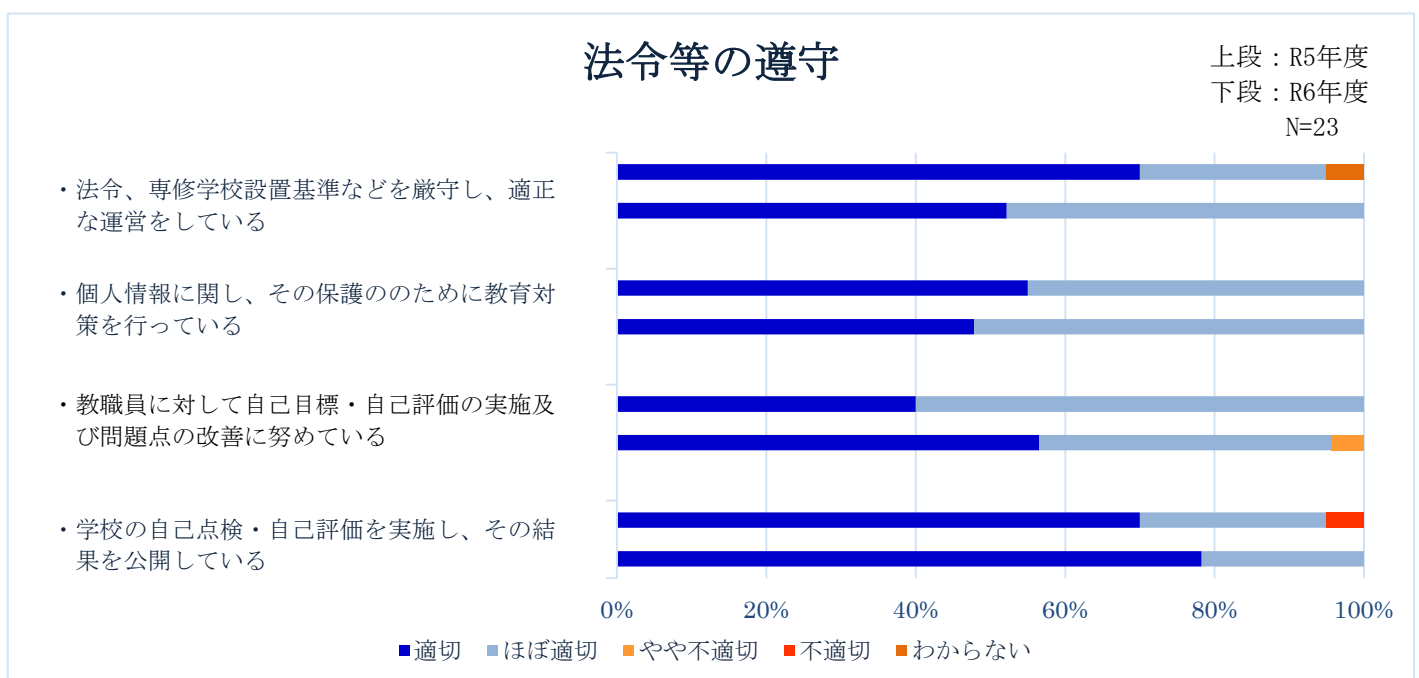


■適切 ■ほぼ適切 ■やや不適切 ■不適切 ■わからない

学校評価	意見
<p>【現状】経営管理の2項目については、約90%が肯定的な意見であったが、「財務状況の情報を、教員に公開している」については「不適切」との回答があった。また、「事業報告を適時行っている」についても「やや不適切」との意見があった。①財務状況については、合同会議等で口頭による報告が行われている。また、閉校時にはここ数年の財務状況について資料での説明がなされたが、「突然閉校を知らされた」「詳細が伝えられていない」といった意見もあり、これが「不適切」との評価につながったと考えられる。事業報告については、報告書が作成され、回覧されている。</p> <p>【総括】「財務状況の情報を教職員に公開している」については、受験者数の減少や定員割れといった経営上の厳しい状況が会議等で報告されてはいるものの、より具体的な収支報告書や改善策の共有を期待する声があったと推察される。また、「事業報告を適時行っている」についても、単なる報告書の閲覧にとどまらず、次年度に向けた戦略を練る機会として活用していく必要がある。</p> <p>【次年度の課題と方略】看護学科では令和8年度入学生が最後の学年となる。閉校が確定し、受験者数・入学者数の大幅な減少が続く中、今後も②経費の一層の削減に努めるとともに、受験者・入学者の一定の確保を図り、収支バランスの改善を目指すことが大きな課題である。あわせて、教職員に対しては詳細な収支報告書を提示し、学校経営に対する意識をより高めてもらう必要がある。</p> <p>具体的な方略としては、以下の点が挙げられる。</p> <p>1. 財務情報の透明化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年1回の詳細な収支報告書の作成・配信を行い、教職員全体への共有を徹底する。 ・報告書に加え、内容説明を含めた報告会を実施 	<p>財務状況の具体的情報を職員は知りたいという気持ちが表れた結果と考える。閉校による職員のモチベーション維持を危惧する。今後、学生数減少に合わせて教育維持に支障のない範囲の人員計画もやむを得ない。</p> <p>財務情報の透明化は、どの組織にとっても課題である。一般的には、運営側と教員の間で認識に齟齬が生じることが多い。改善可能な点については、迅速な対応が求められる。</p> <p>閉校が確定する中で、受験者・入学者の一定の確保を図り、収支バランスの改善を目指すことは本当に難しい事だと思います。教職員への収支報告の提示で理解と協力が得られることを期待します。</p> <p>閉校については長期的な計画の元で進められていると思っているが「突然閉校を知らされた」といった意見があるのは不適切である。</p>

<p>し、理解促進と意見交換の場を設ける。</p> <p>2. 事業報告と経営戦略の連動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年度末の事業報告会では、単なる実績報告だけでなく、次年度に向けた課題の共有と改善案の提示を行う。 ・教職員からの提案や現場の声をもとに、実現可能な取り組みを経営戦略に反映させる。 <p>3. 受験者数・入学者数の一定の確保に向けた広報活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校の特色や魅力を発信する広報資料や動画の作成・配信を引き続き行う。 ・オープンキャンパスや説明会を行い、参加者の満足度を高める。 ・地域の高校との連携を継続し、進路指導担当者へのアプローチを行う。 <p>4. ②経費削減の具体策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・業務の効率化を目的とした ICT の導入・活用を進め、無駄な出費を見直す。 ・施設管理や消耗品の使用に関して、節約意識を全体で共有し、改善策を講じる。 ・定時退勤の徹底。シフト調整により超過勤務を可能な限り減らす。 	
--	--

イ 法令遵守



学校評価	意見
<p>【現状】 法令等の遵守に関する項目については、4項目中3項目が「適切」または「ほぼ適切」と回答した。一方で、「教職員に対する自己目標・自己評価の実施および問題点の改善に努めているか」という項目については、「教員は年度初めに自己目標を設定しているものの、個々の課題に対して具体的な改善策を立てる支援が不十分であり、同様の課題が毎年繰り返されている」という意見があり、「やや不適切」との評価も見られた。</p> <p>【総括】 法令等の遵守については、全体として適切に評価されており、基本的事項が確実に実施されているといえる。個人情報保護はもとより、著作権についても十分な配慮がなされており、慎重に取り扱われている。自己点検・自己評価においては、教職員による評価だけでなく、学校関係者評価委員会を通じて外部からの評価も受けており、その結果はホームページ上で公開されている。これが透明性の高さとして肯定的に評価されたと考えられる。ただし、<u>①教職員が年度当初に立てる自己目標については、その達成状況や内容の検討の機会が不十分であり、改善の余地がある。</u></p> <p>【次年度の課題と方略】 今後も法令を遵守し、適切な学校運営を継続する。あわせて、自己点検・自己評価の結果については、配信ツール等を活用し、全教職員に確実に周知を図る。 また、教職員の意識向上とコンプライアンス強化のため、以下の具体的な戦略を実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 法令遵守に関する研修の適時開催 <ul style="list-style-type: none"> ・法令・個人情報・著作権に関する研修を実施し、最新の法改正にも対応できる知識を共有する。 2. <u>①教職員の自己目標・評価に関する個別支援の強化</u> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>年度初めに、主任、副主任は各教員の自己目標を参考に、具体的な達成計画の作成を支援する。</u> <u>適宜個別面談を実施する。</u> ・中間期（前期末）副校長面接時に前期の振り返りの場を設け、課題の再確認と改善策の検討を行う。 3. 外部評価との連動による改善サイクルの構築 <ul style="list-style-type: none"> ・外部評価の結果と教職員の自己評価を照らし合わせ、客観的な課題の洗い出しとフィードバックの共有を行う。次年度の改善策を検討する。 	<p>法令や専修学校設置基準を厳守した運営がされている。目標管理システムを円滑に実行し可視化することで育成効果が出やすいと考える。 法令等の遵守については、問題は感じられない。適正な運営がなされていると感じる。 法令等の遵守については、基本的事項が確実に実施されており問題はないと思います。 教員の指導・育成（自己研鑽）についても継続して進めていただきたい。</p>

Ⅲ. 教育活動

(1) 教育推進活動

上段：R5 年度
下段：R6 年度

N=23

教育推進活動

・教育理念などに沿った教育課程に編成・実施方針などを適正に定めている



・教育機関として修業年限に対応した教育到達レベルや学習時間の確保は明確にしている



・課程等のカリキュラムは体系的に編成している



・実習施設との連携により、実践的な看護教育の視点に立ったカリキュラムや教育方法の工夫・開発などを行っている



・専門分野における実践的な看護教育を体系的（講義・演習・実習）に位置付けている



・授業評価を実施している



・外部関係者（実習施設等）からの評価を取り入れている



・成績評価・単位認定の基準は明確になっている



・資格取得に向けた指導体制並びにカリキュラムの中での体系的な位置づけはある



・人材育成教育目標に向け授業を行うことができる要件を備えた教員確保に努めている



・先端的な知識・技術などを習得するための研修や教員の指導力育成など、資質向上のための取組を行っている



0% 20% 40% 60% 80% 100%
■適切 ■ほぼ適切 ■やや不適切 ■不適切 ■わからない

学校評価	意見
<p>＜現状＞</p> <p>全体的に「適切」「ほぼ適切」の評価が多数を占めている。</p> <p>「教育理念などに沿った教育課程の編成・実施方針の設定」や、「修業年限に対応した教育到達レベル・学習時間の確保」に関しては、「やや不適切」「不適切」「わからない」の評価は見られなかった。教育理念から教育内容までの評価および見直しは、定期的に実施されている。「課程等のカリキュラムは体系的に編成している」「専門分野における実践的な看護教育を講義・演習・実習として体系的に位置付けている」についても、「やや不適切」「不適切」「わからない」の評価はなかった。夏季・冬季にカリキュラム検討会を開催し、授業および実習内容に関する評価・見直しが行われている。「実習施設との連携による、実践的な看護教育に基づくカリキュラムや教育方法の工夫・開発」については、4%が「不適切」と回答した。実習施設との連携は、実習前後に指導者会議を開催し、実習内容および評価基準についての説明を行っているが、定期的な開催には至っていないという意見が挙げられた。「授業評価の実施」に関しては、34%が「やや不適切」「わからない」と回答した。授業評価を取り入れていない教員が存在し、また、学校としての統一的な評価基準が定まっていないという意見もあった。「資格取得に向けた指導体制とカリキュラム内での体系的な位置づけ」「先端的な知識・技術の習得、教員の指導力育成等の資質向上に関する取り組み」については、「やや不適切」「わからない」の評価は本年度見られなかった。資格取得や教員の知識・技術向上を目的とした研修等への参加が行われている。</p> <p>＜総括＞</p> <p>本年度の評価において、「教育理念に沿った教育課程の編成・実施方針」および「修業年限に対応した教育到達レベル・学習時間の確保」について「やや不適切」「不適切」「わからない」の回答が見られなかったことは、新カリキュラム運用開始から3年が経過する中で、定期的な教育内容の評価と見直しを継続してきた取り組みが教員全体に浸透し、共通理解が深まってきた結果であると考えられる。また、「課程等のカリキュラムの体系的編成」や「専門分野における実践的な看護教育の体系的な位置づけ」についても、同様に否定的な評価が見られなかった点から、カリキュラム検討会による定期的な見直しと教員間の意見交換が機能しており、新カリキュラムの運用が安定してきている状況がうかがえる。</p>	<p>新カリキュラム3年経過し、様々な取り組みが職員に浸透していることが解かる。中間評価や年間評価等 PDCA サイクルしながら活動してほしい。</p> <p>概ね、教育推進活動は順調であると言える。「授業評価を実施している」の項目については、教員ごとの対応に差が出ないように運用基準の統一化が必要であると感じる。特に、学生からの評価は、教育活動改善に大いに参考になるものである。</p> <p>教員の研修参加や自己研鑽への意欲が継続的に維持されていることは、教育の質の保証に繋がっていると思います。次年度への課題と方策を実行されることで全体的に高評価であり、継続で良いと思います。</p> <p>カリキュラムのなかで単位を取得することが優先されるのは理解できるが、実践的な学習や知識と経験（実習）がリンクするような授業を期待している。高度な専門性が必要なため、学習が現場や日常生活にも直結するような授業を各先生に期待します。</p>

一方で、「実習施設との連携による教育内容の工夫・開発」においては、一部で「不適切」との評価が見られた。これは、実習前後の指導者会議は実施されているものの、定期的な開催や継続的な情報共有が困難であることが影響していると推察される。実習施設が多岐に及ぶ中でも、より柔軟な連携方法の検討が今後の課題となる。また、①「授業評価の実施」については、学校全体での評価用紙はあるもののその運用基準が統一されておらず、教員ごとの対応に差がある点が明らかとなった。これは講義や演習の質の向上に対する取り組みが一部にとどまっていることも示しており、学校全体での体制強化が求められる。「資格取得支援体制」および「教員の資質向上に向けた取り組み」については、全ての回答が「適切」「ほぼ適切」であったことから、教員の研修参加や自己研鑽への意欲が継続的に維持されており、教育の質向上につながっていると評価できる。これらの取り組みを今後も継続・強化していくことが重要である。

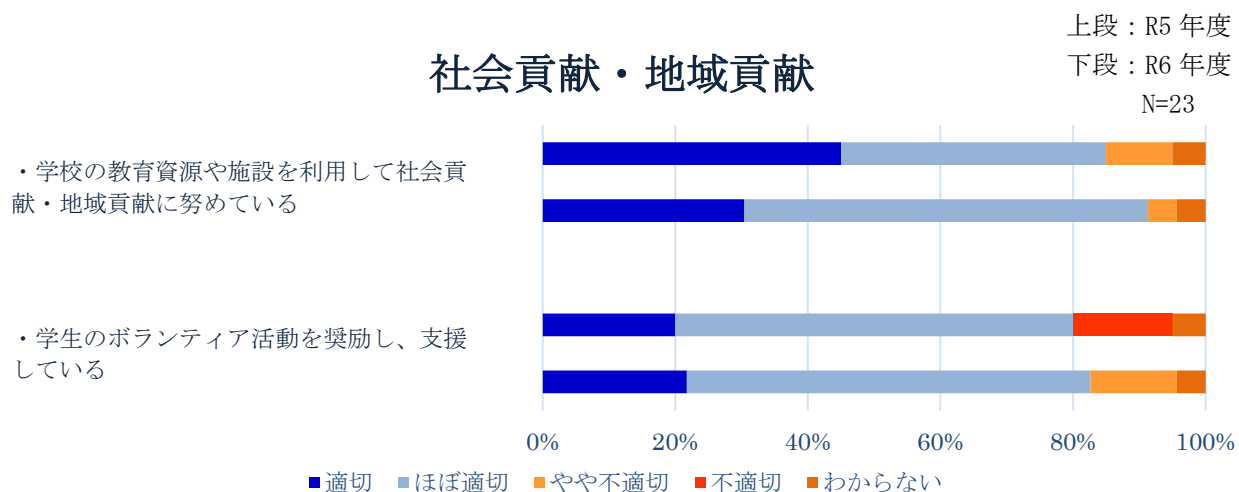
<次年度への課題と方策>

今年度は新カリキュラムの完成年度にあたり、3年生の実習成果を踏まえて、1年次から3年次までの学修内容・進度の一貫性や連動性について再評価し、必要な修正を加えることが求められる。以下の課題に対し、具体的な方策を講じていく。

1. カリキュラム全体の評価と見直し
 - ・3年次実習の到達状況を分析し、逆算的に1・2年次の教育内容の精査を行う。
 - ・カリキュラム検討会を引き続き継続し、各年次の教員が連携して内容の統一性・系統性を確認する。
2. 単位履修に関する新規程への対応
 - ・全教員対象に新規程の説明会を実施し、規程内容の共通理解を図る。
 - ・年度初めに学生向けの履修説明会を開催し、履修に関するルールや注意点を周知する。
 - ・教員間の定期的な情報交換会を設け、運用上の課題や対応策を共有する。課題が生じたい際は迅速に報告、報告を受けた主任会は適切に対処する。
3. 実習施設との連携強化 下記についても引き続き継続していく。
 - ・オンライン会議の導入により、実習前後の連絡調整の柔軟化を図る。
 - ・実習施設ごとに担当教員を配置し、施設との継続的な関係性を構築する。
 - ・実習後の学生アンケートや記録を活用し、次年度への改善点を可視化して施設にフィードバック

<p>クする。</p> <p>4. ①授業評価の体制整備</p> <p>・学校全体として授業評価の目的・方法・時期を明文化し、共通フォーマットを使用しての授業評価を推進する。</p> <p>・年に1～2回の評価期間を設定し、教員が評価結果を分析・振り返る機会を設ける。</p> <p>・授業改善に向けた教員間の情報共有会を開催し、評価結果を教育内容の質向上につなげる。</p> <p>5. 教員の資質向上の継続</p> <p>・外部研修・学会への参加を奨励し、年度末に成果報告の場を設けて情報共有する。</p> <p>・校内での自主的な勉強会や事例検討会を定期開催し、指導力向上と知識のアップデートを図る。</p>	
---	--

IV. 社会貢献・地域貢献・国際交流



学校評価	意見
<p><現状></p> <p>社会貢献・地域貢献については、以下の通り毎年取り組んでいる。しかし、担当者が限定されているため、「やや不適切」「わからない」との回答が見られた。その理由として、「あまり実施されていると感じられない」「地域交流ができていない」といった意見が挙げられた。学生ボランティア活動については、「不適切」との回答は大幅に減少したものの、約20%が「やや不適切」「わからない」と回答していた。その理由として、「コロナ禍以降、ほとんど実施されていないため分からない」「参加の機会が少ない」「ボランティア活動が十分に奨励されていない」といった意見があった。学生の具体的な活動としては、助産学科による恒例の性教育授業や、看護学科の学生が主催団体関係者および他大学の学生ボランティアとともに薬物撲滅の街頭活動に参加した。</p>	<p>職員および学生が地域に出ていき活動することは実践的な経験も積み、社会人基礎力も高める機会にもなるので時間の許す限り継続してほしい。そうすることで地域住民や高校生が医師会看護専門学校を知る機会に繋がる。</p> <p>他の項目と比較して、「やや不適切」・「わからない」の回答が少なからず見られる。検証して対応を期待したい。</p> <p>社会貢献・地域貢献ではコロナ禍以降、どの業界でも機会の減少はあると思います。教員への一人一つの社会貢献活動の目標設置は、分かり易く、意識づけにも繋がると思います。また、学生らのボランティア活動も、継続できれば良いと思います。</p> <p>ボランティア活動をしている学生が少ないような印象を受ける。また、社会貢献や社会活動は実際に小さなことでも評価に値する内容はあ</p>

<p>＜総括＞</p> <p>今後も引き続き、学校の人材・教育資源・施設を活用した地域貢献に努める。また、個人が学校として引き受けている活動についても、全職員が「他人事」ではなく「自分事」として認識できるよう、協力体制を強化していく。分野別模擬授業等の講師派遣については、「輪番制にする」という提案もあった。さらに、地域貢献は地域の方々への挨拶や声かけ、清掃活動など、日常の学校生活の中で実践できることから始めるのも一案である。学生のボランティア活動については、依頼があれば積極的に参加するよう働きかけていく。</p> <p>＜次年度の課題と方略＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員は一人ひとりの社会貢献活動を目標とする。 ・学生部の挨拶運動を、学生・教員間だけでなく地域の方々にも広げることを提案する。 ・クリーンキャンペーンの一環として、全学年で地域清掃活動を実施することを提案する。 ・特待生に限らず、全学年の学生が積極的にボランティア活動へ参加する機会を増やす。 ・次年度は、看護の日の活動に京都府下の学校代表として参加予定である。 	<p>はず。学生が積極的に申し出られるような環境作りも重要か。</p>
---	-------------------------------------

1. 社会貢献

【洛東高等学校実習受け入れ】

第1回目 日時：令和6年6月18日（火）14:00～15:30 対象：2年生19名

内容：姿勢と体位変換 担当：赤尾・平沼・竹中

第2回目 日時：9月24日（火）14:00～15:30 対象：2年生19名

内容：移送と移乗（車いす・ストレッチャー） 担当：大桐・澤田・平沼

第1回目 日時：6月20日（木）14:00～15:30 対象：3年生17名

内容：バイタルサイン シミュレータを使つての観察 担当：北西・白木・山田

第2回目 日時：10月3日（木）14:00～15:30 対象：3年生17名

内容：新生児の沐浴 新生児の心音聴取 担当：西雄・山田・北尾

【東稜高等学校実習受け入れ】

第1回目 対象：3年生30名 日時：7月17日（水）12時50分～14時50分

内容：講義＜人を支える仕事＞ 演習＜シミュレータを使つての観察、赤ちゃんの世話＞

講義担当：秋山 演習担当：北西・安達・澤田・山田 校内見学：秋山、橋戸

【京都市委託事業】

潜在看護力再チャレンジ講座 2月19日～20日 10名参加

講義担当：秋山 演習担当：野村・北西・安達・堀内・山田・竹中

内容：講義/看護の動向・医療安全・看護倫理 演習/吸引、採血、輸液ポンプ、シミュレータを使った演習、救急対応、急変時の対応 その他/ナースセンター事業紹介

【講師派遣】

- ・日本看護シミュレーションラーニング学会指導者養成コース指導者・研修会講師 北西富恵
ベシックスコース 7月6日 12月15日
アドバンスコースⅠ 2月10日～5月1日 9月3日～11月1日

アドバンスコースⅡ 2月10日～

- ・洛東高等学校 9月19日 北西富恵
- ・京都府看護協会 実習指導者講習会 母性看護学講義 11月19日 橋戸好美
- ・京都府看護協会 実習指導者講習会 母性看護学演習 12月2日～6日 橋戸好美
- ・京都府看護協会 実習指導者講習会 老年看護学演習 12月2日～6日 赤尾景子

【分野別模擬授業（看護専門学校）】

- 5月31日 京都府立木津高等学校 秋山
- 6月5日 京都両洋高等学校 石田
- 6月14日 京都府立八幡高等学校北キャンパス 橋戸
京都府立八幡高等学校南キャンパス 赤尾
- 7月11日 京都府立鴨沂高等学校 秋山
- 7月18日 京都精華学園高等学校 橋戸

【学会/職能関係】

- | | | |
|----------------------|-------------|-----------|
| 日本看護シミュレーションラーニング学会 | 研修企画委員会委員 | 北西富恵 |
| 日本看護シミュレーションラーニング学会 | 研究活動推進委員会委員 | 北西富恵 |
| 京都母性衛生学会理事・副編集委員長 | | 秋山寛子 |
| 京都府看護協会選挙管理委員 | | 秋山寛子 |
| 京都府看護協会推薦委員 | | 井上沙織 |
| 京都府看護協会総会協力委員 | | 井上沙織 秋山寛子 |
| 京都府看護協会准看護師制度特別委員会委員 | | 秋山寛子 |
| 山科保健センター運営協議会委員 | | 秋山寛子 |
| 京都府立洛東高等学校運営協議会委員 | | 秋山寛子 |

<学生の活動>

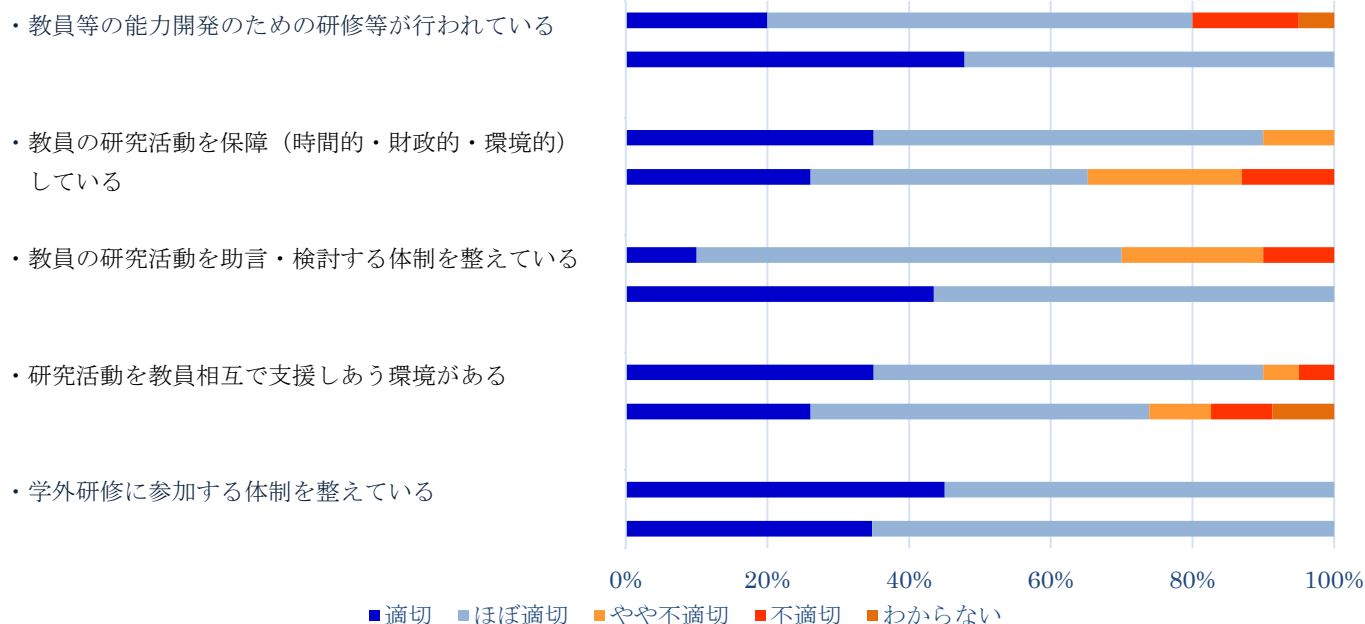
- ①6月22日 きょうと薬物乱用防止行動府民会議主催「ヤング街頭キャンペーン」に参加した。
内容：京都市内繁華街4箇所（京都駅、三条河原町、四条河原町、四条高倉）で薬物乱用防止啓発資材の配布及び募金活動を行った。看護学科学生4名が参加した。
- ②2月25日 性教育授業の実施 テーマ：自分とあなたの未来のために～いまからできること～
対象：京都府立洛東高等学校2年生 参加者18名 助産学科16期生19名

研究・研修

上段：R5 年度

下段：R6 年度

N=23



学校評価	意見
<p>＜現状＞</p> <p>研修に関する 2 項目については、100%が肯定的な評価を得た。昨年「不適切」と評価されていた『研究活動に関する助言・検討体制』については、今年は 100%が肯定的な評価となった。一方で、「研究活動の保障（時間的・財政的・環境的）」「教員相互での研究支援環境」については、依然として約 30%が「不適切」「わからない」と評価していた。その理由としては、「多忙な業務の中で時間確保が難しい」や「時間外に取り組むことへの不満」が挙げられた。また、一部教員からは「研究活動を行っていない自分への反省」といった意見もあった。教員相互の支援に関しては、「研究活動を行っていないので支援し合えていない」といった意見も少数ながら見受けられた。さらに、「研究の必要性を教員自身が認識し、行動を起こすことが重要ではないか。そのためには、刺激し合い、協力し合い、支え合う意識とアクティブなコミュニケーションが必要だ」という提言もあった。教員が参加した研修・学会については、下記の通りである。</p> <p>＜総括＞</p> <p>研修については、積極的に参加できた教員もいる一方で、外部研修に未参加の教員も見受けられる。まずは、全教員が少なくとも 1 回は研修に参加できるよう、計画的に進めていく必要がある。</p>	<p>研究に対する職員からの意見が、昨年に比べて積極的に変わってきたように思える。時間確保や経済的支援は課題になるが、研究活動は教員の実績になり閉校後の就職にも影響するので頑張してほしい。</p> <p>運営者側からの研修は、順調に実施されていることが分かるが、教員自らが研究活動することに、その体制の構築に課題を感じる。教員にとって、修養と研鑽は特に重要であることを再確認したい。</p> <p>「研究 活動の保障（時間的・財政的・環境的）」「教員相互での研究支援環境」では、現実的に時間確保が難しいのだと思います。実行をするならば、確実な時間確保と協力体制を整えることが必要だと思います。</p> <p>研究活動を教員相互で支援しあう環境があるに對しての評価が低い。研究の必要性を感じていない教員がいることが非常に残念。教員の姿を見て学生は成長していくと考えています。具体的に教員が研究に取り組むためにはどのような支援を行うのか明確な提示は困難でしょうか。</p>

<p>研究活動については、多くの教員が「時間確保の困難さ」を挙げており、研究の必要性を感じていない教員もいると考えられる。しかし、研究活動は今後の教員の実績として重要となるため、閉校までにその実績を積むよう支援していく必要がある。</p> <p>＜次年度の課題と方略＞</p> <p>次年度も引き続き、教員一人ひとりが研究テーマを持ち、研究活動を積極的に行えるよう支援していきたい。</p>	
---	--

2. 研修・学会

【学内企画】

＜シンポジウム＞

①12月24日 テーマ：各学年の特徴に合わせた関わりの評価と次年度の課題

1年生：松井・平沼・中嶋・大桐 2年生：新井・堀内・佐藤・西雄・北西

3年生：白木・高橋・安達・澤田 助産学科：伊庭・井上・守屋・井本 シンポジウム委員会主催

＜集合研修会＞

①6月15日 テーマ：教育について語ろう～チーム力の向上、教育実践の向上を目指す～

内容：①教育理念・教育目的と目標・年次目標と学年別目標の整合性 ②本校の学生の特徴について明らかにする

1年生：松井・平沼・中嶋 2年生：新井・堀内・佐藤・西雄・安達

3年生：白木・高橋・安達 助産学科：橋戸・伊庭・井上・守屋・井本 F：赤尾・大桐・澤田・北西

②9月8日 テーマ：カリキュラム評価

内容：主観的見解から抽出した学生の姿とディプロマポリシーと照らし合わせ、3年間のカリキュラム運営を振り返る機会とする

1G：大桐・中嶋・西雄・白木 2G：北西・佐藤・平沼 3G：澤田・松井・高橋

4G：守屋・井上・伊庭・（井本） 研修委員会主催

③9月17日 テーマ：医療従事者を守るための暴力・ハラスメント対策

講師：藤田法律事務所 弁護士 蒔田 寛 日本看護学校協議会（オンライン）

④2月26日 テーマ：なりたい自分を求めて人生を成功させよう

講師：フローレンスアニーナースィングホーム所長 野村佳子氏（卒業講演）学生50名職員20名

＜カムバックスクール＞

①8月17日（土）テーマ：看護師として ～あなたはあなただから大切なのです～

講師：稲荷山武田病院 緩和ケア病棟 谷口知佐子氏 卒業生12名 教員等20名

【学校外】

＜研修＞

①4月13日 ニューレジリエンスフォーラム ニューレジリエンスフォーラム京都大会～感染症と自然災害に強い社会～大会長 三村明夫氏（日本製鉄株式会社名誉会長）京都産業会館みやこメッセ 橋戸

②7月20日～11月30日 看護教育力アップ、課題解決セミナー

テーマ：Z世代学生に響く指導術 講師：野津浩嗣氏（有限会社AEメディカル）

1.Z世代の特徴と向き合い方 2.Z世代に響く効果的な「ほめ方」 3.Z世代に響く効果的な「注意の仕方」「叱り方」 4.Z世代に響く効果的な「伝え方」 5.明日からの指導にいかすために オンデマンド 赤尾

③7月20日～11月30日 看護教育力アップ、課題解決セミナー

学力の整理と広がる格差への支援について考える 講師：西森章子氏（広島修道大学）

1年目の教育のあり方を考える 講師：細川和仁氏秋（田大学大学院教育学研究科）

看護の専門性における教養教育の重要性 講師：矢野博史氏（日本赤十字広島看護大学） 赤尾

④7月23日 京都府看護協会 「看護師が知っておきたい発達障害の基礎知識」

村松陽子氏（京都市児童福祉センター、京都市発達障害者支援センター、児童精神科医） 佐藤

⑤7月28日 第46回日本産婦人科医会性教育指導セミナー全国大会 テーマ：どうするネット社会の性教育～SNSの功罪を考える～ 講師：浅井春夫氏（立教大学名誉教授）他 主催：日本産婦人科医会 井上 伊庭 涼香

⑥8月18日 第1回 テーマ：看護・助産師教育でなぜパフォーマンス評価か

講師：細尾萌子氏（立命館大学）他 主催：創元社セミナー 井本

⑦8月30日 第2回 テーマ：助産師教育におけるパフォーマンス評価の実際 看護・助産師教育にパフォーマンス評価をどう活用する？本音で語るセミナー

講師：村上明美氏（神奈川県立保健福祉大学）他 主催：創元社セミナー 井本、伊庭、井上

⑧8月31日 第3回 テーマ：看護教育におけるパフォーマンス評価の実際

講師：池西静江氏（office kyo-shien 代表）他 主催：創元社セミナー 井本

⑨8月22日・23日 大阪府専任教員養成講習会「専門領域別看護論演習特別講義聴講」 講師：目黒悟氏（元藤沢市教育文化センター 主任研究員） 平沼

⑩10月24日～11月6日 一般社団法人日本看護学校協議会 周術期管理～手術看護の必須知識と術中看護の重要ポイント～講師：山内薫氏（京都府立医科大学医学部附属病院 手術看護認定看護師） 平沼

⑪12月10日 京都府看護協会 超高齢社会で求められる高齢者ケアの実際～フィジカルアセスメントを中心に～講師：古谷和紀氏（京都大学医学部附属病院 老人看護専門看護師） 中嶋

⑫12月13日 京都府看護協会 地域で暮らす高齢者を支える看護職連携の実際 講師：岸恵美子氏（東邦大学看護学部学長）他 大桐

⑬1月12日 新生児蘇生法専門コース（Aコース）講師：宮本美由紀氏（ひなたぼっこ助産院） 井上

⑭2月1日 京都科学(in KYOTO) 医療DXが進む中、看護基礎教育で求め いつもの演習・実習でシミュレーターをうまく使いたい！と思っている人のためのセミナー 講師：西村礼子氏（東京医療保健大学医療保健学部教授） 堀内、新井

⑮2月4日 日本母体救命システム普及協議会 J-CIMELS 母体急変時の初期対応

講師：橋井康二氏（ハシイ産婦人科院長）他 井本、井上

⑯2月8日 新生児蘇生法「Aコース」講習会院内開催 神戸市立西神戸医療センター内 守屋

⑰3月15日、16日 防災士研修講座 主催：防災士研修センター 場所：難波御堂筋ホール 井上

<学会>

①6月29日 京都母性衛生学会学術集会 学会長：最上晴太氏 教育講演：双胎・骨盤位の妊娠・分娩管理 日本医科大学大学院 女性生殖発達病態学分野 鈴木 俊治教授 京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻学舎 橋戸、秋山

②11月2日 日本シミュレーション医療教育学会学術大会 テーマ：ザ・シミュレーション医療教育～past,present,future and beyond ～

大会長：愛媛大学医学部附属病院総合臨床研修センター教授 熊木天児氏 北西

③8月31日～9月1日 日本災害看護学会 第26回年次大会 テーマ：災害に強く、そして備えを 大会長：藍野大学看護学研究科 医療保健学部看護学科 西上あゆみ氏 井上

【長期研修】

①5月7日～11月22日 公益社団法人 大阪府看護協会 大阪府専任教員養成講習会

講師：弘川摩子氏（大阪府看護協会会長）他 オンラインと対面併用 井本寛美